

CONTENTS

公開セミナー「デルタと海水準変動」が
上海の華東師範大学で開催

第8回地球システム・地球進化ニューイヤー
スクール開催報告

「移動地質標本館
(産総研キャラバン2010みやぎ)」出展報告

うしくサイエンスフェスタ2010出展報告

第9回全地連(技術委員会)ー産総研(地質調
査総合センター)の懇談会開催報告

インドネシア地質局専門家会議報告

地質試料の移動作業の報告

ジオネットワークつくばニュース1月号

スケジュール

編集後記

公開セミナー「デルタと海水準変動」が 上海の華東師範大学で開催

斎藤 文紀(地質情報研究部門)

地質情報研究部門が推進している日本学術振興会のアジア・アフリカ学術基盤形成事業「メガデルタ監視技術に関するアジアにおけるネットワーク構築と人材育成」の公開セミナー「デルタと海水準変動」が2009年12月21日と22日に中国上海の華東師範大学で開催された。地球温暖化に伴う海水面の上昇は、IPCC(気候変動に関する政府間パネル)の報告書でも指摘されているように沿岸低地に多大な影響を及ぼし、人間活動への影響が懸念されている。特にアジアには低平なデルタ平野が広がっており、アジアのメガデルタは最も脆弱な地域の一つとされている。今回のセミナーは、現在の海水準変動の理解のために、過去の海水準変動をいかに地層や地形から読み取るか、氷河性とハイドロアイソスタシーは相対的な海水準変動にどのように影響しているか、海水準の上昇が沿岸海洋にどのような環境変化を及ぼしたかの3点に絞って、筆者と奥野淳一氏(国立極地研究所)、上原克人氏(九州大学)がそれぞれ講演した。22日に全日を使って行われたセミナーには、天津、青島、南京など上海以外の大学や研究所からの参加を含めて、9つの機関から約60名が参加し、海水準変動に関する基礎的な事項から、中国沿岸から東シナ海の最新の成果が報告され、活発な議論が行われた。また前日の21日には、長江デルタの巡検が行われ、新しく開通した長江のトンネルと橋を使って河口の崇明島に渡り、潮間帯に広がる泥質干潟の堆積物の観察、ボーリングコアの見学等を行った(写真1,2)。同事業では、2010年6月に同じく中国の青島において、「デルタと沿岸侵食」に関するセミナーを、また10月にベトナムのハイフォンにおいて、「デルタと環境保全」に関する公開セミナーを予定している。関心がある方は斎藤まで。



写真1 長江デルタの崇明島で行われた地質巡検。崇明島の中に国家地質公園が整備され、沖積層のボーリングと現在の表層堆積物のコアが屋外に展示されている。一般の人も環境変遷を容易に学べるように配慮されている。



写真2 長江河口の崇明島は、国家地質公園に指定されており、多くのエコツーリストが訪れている(2009年7月撮影)。

第8回地球システム・地球進化ニューイヤースクール開催報告

井上 卓彦・大坪 誠（地質情報研究部門）

2010年1月9日～1月10日の2日間、国立オリンピック記念青少年総合センター（代々木）において第8回地球システム・地球進化ニューイヤースクールが開催されました。このスクールは、地球惑星科学の研究に取り組んでいる学生・研究者が主催し、集中的に広範な講義を受け、「地球科学研究の今後のあり方」に共有意識を持つことを考えながら、企画・運営を行っています（主催：ニューイヤースクール事務局、後援：海洋研究開発機構、高知大学海洋コア総合研究センター、産業技術総合研究所地質情報研究部門、東京大学海洋研究所海洋底科学部門、日本地球掘削科学コンソーシアム）。

8回目を迎えた今回のスクールは、これまでのスクールの趣旨を発展させ、これまで解明されてきた知の共有という方向性から一歩踏み出し、「これから先の地球科学研究」を知ることに重点を置きました。今回は「地球を旅する水の科学」と題して「水」をテーマに企画し、各分野において著名な研究者を講師として招き、研究分野の地球科学全般における位置づけや現在の重要なトピックス、今何が最も問題となっているのかを講演いただきました（通常レクチャー）。加えて、アウトリーチや企業に関わる方に自らの経験や現状について講演いただいています（Exレクチャー）。

1日目の通常レクチャーでは、杉田精司氏に「惑星の水」として「火星探査が明かす火星表層環境の初期進化」、鍵 裕之氏に「固体地球深部の水」として「光と中性子で探る、地球深部物質中の水の正体」、浦辺徹郎氏に「熱水と生命」として「海底下の大河における地球化学的循環について」を講演いただきました。また、Exレクチャーでは、須藤 斎氏「子供向けの本を書く～わかりやすく研究を伝える～」や、大木聖子氏「地球科学研究者のLiberal Arts」の講演がありました。1日目のプログラム終了後には、講師と参加者、参加者同士の議論をし、交流する場として懇親会を行いました。

2日目の通常レクチャーでは、後藤和久氏が「水と災害」として「沿岸巨礫群～堆積学のラストフロンティアから挑む沿岸波浪災害～」、小橋史明氏が「現代の海洋・大気循環」として「北太平洋の表層循環と大気海洋相互作用」、川村賢二氏が「過去の氷床・気候変動」として「3kmのタイムカプセル：極域の氷床コアから気候変動のメカニズムを探る」を講演して下さいました。Exレクチャーでは萩谷 宏氏の「自然科学科の立ち上げ～いまこそ博物学の時代をつくろう」、千葉達朗氏の「赤色立体地図とは～一枚で立体的に見える地形表現法の発想～」、泊 次郎氏の「科学記者から地球科学史研究へ」の講演が行われました。

各講演日の最後には、参加者が主体となって講演内容を議論・考察する「グループワーク」を企画しました。これは参加者が今後研究生活を進めるにあたって、他の参加者や講演者との考え方やアプローチの相違を意識してもらい、各自の将来のビジョン確立を手助けすることを狙っています。また講師の方々にはグループワーク終了後に各グループから出された疑問点について回答いただきました。

当日の参加者は学部生29名、修士課程30名、博士課程24名、ポスドク14名、常勤職員16名の計113名ののぼり、北海道から九州まで全国の学生・研究者が見られ、特に学部や修士の若い学生たちに多く参加いただきました。本スクールは学生が主体となり、自分達の聴きたい講義を聴くということで企画しましたので、それが上手く参加者に伝わったものと思われます。スクール後に実施したアンケートによれば、“多岐にわたり、非常に勉強になった”や“大学にいただけだと聞けない話ばかりで参加してよかった”など肯定的な意見や今後の教訓となる意見をいただきました。今後も参加者の貴重な意見を参考に、参加者目線で企画していきたいと思えます。ニューイヤー



写真1 杉田精司氏による講演。



写真2 グループワークの様子。

スクールのウェブサイト（<http://quartz.ess.sci.osaka-u.ac.jp/~earth21/school/gakkou/gakkou.html>）では、これまでに開催されたスクールの内容やアンケート結果などが

紹介されています。

最後に講師の方々、スクールの開催・運営にご協力いただいた機関やご支援いただいた皆様にお礼申し上げます。

「移動地質標本館（産総研キャラバン2010みやざき）」出展報告

吉田 朋弘（広報部地質標本館）

2010年1月30日（土）～31日（日）に宮崎県総合博物館（宮崎市神宮）で開催された【産総研キャラバン2010みやざき】において、「移動地質標本館」を出展しました。通常の来館者が休日で300人程度のところ、事前宣伝（チラシ等）やTV局の取材・放送のおかげもあり、30日に1,000人強、31日は、雨天かつ巨人軍優勝パレードのあるなか2,000人強の来場者で、会場内は身動きも取れないほどの大盛況でした。

出展内容は、【展示と解説コーナー】として「20万分の1シームレス地質図 [九州南部]」と「赤青メガネ・プリズムメガネでみる3D地質図」を、【標本展示】として、「青柳鉱物標本6点」「パンフ [石を見る] 関連展示」「触れる標本 [巨大アンモナイトほか]」を展示し、酒井 彰氏・長森英明氏が対応しました。【体験コーナー】は、「ペーパークラフト [飛び出す火山]」を宮内 渉氏が担当し、「砂で遊ぼう・学ぼう！」のコーナー（写真）を吉田が担当しました。

酒井氏は既に手馴れたもので、赤青メガネでみる3D「デスモスチルス」では、「メガネを持ったまま、頭を左右に振ってごらん。デスモも首を振るよ。」と教えて、子供たちが一斉に頭を左右に振っていたのが印象的でした。

長森氏は、「移動地質標本館」初参加のため最初は戸惑っていたようですが、あとで話を聞くと、「最初は来場者の質問に懇切丁寧に回答していたけど、そうなると他の人の相手ができなくなるので、適度に回答するようにした。」とのことでした。

宮内氏は、ある意味一番苦労したかもしれません。9人掛けのテーブルを一人で仕切るのですが、私たちの想像を超える来場者とペーパークラフトの体験者のため、用意した168個のうち125個が初日に作成されてしまいました。初日の残り43個と追加用の5種類70個を足した113個は2日目の

13:30には無くなってしまい、作成時間を要するため通常あまり出さない「富士山」で、その後15:00頃までしのぎました。

キャラバンの場合、ロボットデモが行われるのでそのタイミングに休憩をとれるのですが、一度デモを見た来場者は引き続きペーパークラフト作成に残り、宮内氏は休憩するタイミングを逃したようです。

私は、休憩自体はタイミング良く（半ば強制的に）とりましたが、自由に遊んでもらう「砂変幻」、「エッキー・エキジョッカー・板ジョッカー」、「手作り砂時計」、「オベリスクを立てよう！」の解説（遊び方）は、来場者が次々と来るため「これ何？」と聞かれるたびに説明し、のどを痛めてしまいました。

最後に、今後宮崎へ出張される方に一言。市内へのアクセスに便利なので、宮崎駅近くのホテルよりも、路線バスのバス停「デパート前」近隣のホテルが個人的にはお勧めです。詳しく話をお聞きになりたい場合は吉田まで。



写真 「砂で遊ぼう・学ぼう！」のコーナーの様子。

うしくサイエンスフェスタ2010出展報告

兼子 紗知・利光 誠一・古谷 美智明（広報部地質標本館）、兼子 尚知（地質情報研究部門）

2010年1月30日、牛久市中央生涯学習センターで開催された「うしくサイエンスフェスタ2010」（主催：牛久市教育委員会ほか）に移動地質標本館を出展しました。

出展内容は「化石のスクラッチをしよう」で、化石の上

に紙を置いて、上から鉛筆でこすり、化石の形を写し取る体験学習です（写真）。小学校低学年を中心に102名の体験者がありました。用意するものは化石、鉛筆、紙です。スクラッチ用の化石はアンモナイトを用意しました。また

殻の内部を観察してもらえるように2つにスライスしたアンモナイト化石、アンモナイトの生態復元模型も用意しました。鉛筆はBや2Bの芯のやわらかいものと色鉛筆等を用意し、紙はてんぷら敷き紙を切って使用しました。まず体験者には、「化石って見たことある?」、「アンモナイトは知っている?」というような質問からはじめました。体験者からの回答は半々といったところでしょうか。小学校高学年になると化石やアンモナイトについて「見たことあるよ」、「知っている」と答える子どもが多いのですが、低学年だと知らない子どもが多いようです。

スクラッチの手順は次のとおりです。まず、アンモナイトの化石を観察してもらい、どの辺に化石があるか覚えてもらいます。化石の上にやわらかい紙を置いて、鉛筆を少し斜めにして軽く化石の上をなぞるようにこすります。すると、少しずつ化石の形が浮かび上がってきます。化石の形をしっかりと写し取り、もとの化石と見比べて作業は終了です。

私たちが子供の頃は、10円や100円硬貨の上に紙をおいて、上から鉛筆でこすって硬貨の形を写し取る遊びをしたことがありますが、今の子どもたちはあまりそういった遊びはやらないようです。鉛筆は斜めにしてこするのがポイントですが、年齢層が低くなると、どうしても鉛筆を立てたままこすってし

まったり、力を入れすぎてしまったりと、なかなかうまくこすりだしができない子どももいます。しかし何回かチャレンジすると、コツをつかめるようでした。簡単な体験学習でしたが、化石に興味をもったり、地質標本館に行ってみようという気持ちを持ってもらえたりしていただけたら幸いです。

他のブースでは、「紋切り」や「切り折り紙飛行機」、「プラネタリウム上映」などの工作や実験がおこなわれており、会場全体の来場者数は主催者によると1,000人を越え、大盛況でした。



写真 化石スクラッチをしている様子。

第9回全地連（技術委員会）－産総研（地質調査総合センター）の懇談会開催報告

古川 竜太・中島 礼（地質調査情報センター）

平成22年2月2日に全地連（全国地質調査業協会連合会）の技術委員会と産総研地質調査総合センターとの懇談会が、つくば中央第7事業所第2会議室で開催されました。この懇談会は1年に1回、全地連とGSJとの活動報告と意見交換の場として開催されており、今回で第9回目となります。全地連からは技術委員会の12名と事務局の2名、産総研からはGSJ代表や部門長をはじめとした17名が参加しました。

懇談会ではまず、加藤碩一GSJ代表と全地連技術委員会委員長である成田 賢氏の挨拶で始まりました。加藤代表はボーリングデータの利活用や人材育成交流、ジオパークなどアウトリーチへの取り組みについて、成田氏は公共事業の削減による旧来のビジネスモデルから新規ビジネスモデルの創出の重要性について述べられました。

全地連とGSJとの活動報告として、まず全地連事務局長の池田俊雄氏が「ジオパーク関連 地質リスク活動 新マーケット創出・提案型事業」と題された講演をされました。この講演では、全地連が力を入れているジオパーク活動に基づく地域振興プロジェクトや書籍の出版、今年1月に発足した「地質リスク学会」や米国土木学会で出版されたGeotechnical Baseline Report (GBR)の翻訳出版、複数の会社や組織が集まってできる新規事業への連携や支援について話されました。ジオパークや地質リスクについて、全地連とGSJは協力関係で活動していますが、全地連はとくにこれらの活動のマネジメントに力を入れているとのこと。地質リスク学会（www.georisk.jp）は2011年まではウェブを利用したバーチャルな学会として、情報収集を主とした活動を行っていくそうです。

続いて産総研の活動報告ですが、渡辺真人氏（地質情報研究部門）による「産総研におけるジオパーク活動」、駒井 武氏（地圏資源環境研究部門）による「土壌汚染のリスク管理と地圏環境情報の整備」、小笠原正継氏（地質情報研究部門）による「地質リスクマネジメントの意義—米国土木学会『ジオテクニカル・ベースライン・レポート』から—」の3件の講演がなされました。ジオパークによる地域の活性化や企業との連携、リスクマネジメントによる工事などの費用削減など、3氏の講演はいずれも地質情報を正確に取得して有効に活用することの重要性が述べられました。

最後に全地連とGSJとの意見交換として、佃 栄吉研究コーディネータが「地質地盤情報の整備と公開に関する法整備について」と題した講演を行いました。地質地盤情報としてのボーリングデータの整備やデータベース化は、日本は世界的にも遅れており、自治体や研究所などに働きかけるためにも法整備に向けた議論が大切とのこと。GSJは全地連とともにこの議論を進めていくことを約束しました。



写真 懇談会の様子。左手が全地連、右手がGSJの参加者。

地方自治体を含めた産学官がそれぞれ連携することで、地質情報を活かした研究や産業や事業、地域振興が新しく生まれます。今回の懇談会はそれらを生み出すためのテーマが活発に議論されました。研究者であるGSJ側も、今後は役立つ地質情報を広く普及していく活動が必要だと感じました。

インドネシア地質局専門家会議報告

高橋 浩（地質調査情報センター）

2010年2月3、4日にインドネシア、バンドン市内のHorison Hotelにおいて、エネルギー鉱物資源省インドネシア地質局主催の専門家会議が開催され、GSJからは脇田浩二地質調査情報センター長と高橋 浩が参加しました。本会議で脇田センター長は、GSJの過去5年間の地質図幅整備状況と今後5年間の地質図幅整備計画について講演を行いました（写真）。

インドネシアでは、経済活性化のためインフラ整備による外国企業の誘致を目指しており、そのために地質図の早急な整備が求められています。現在インドネシアでは25万分の1地質図幅は全国整備されていますが、5万分の1地質図幅の整備は遅れており、2010～2014年の5年間で約5,000枚の地質図を作成するよう政府から強く要請されています。全国土で約5,000枚ある5万分の1地質図幅を5年で完成するのは、普通の方法ではとうてい不可能です。実現可能な方法としては、全国規模で完成している25万分の1地質図幅を元に、地理情報システムを利用して拡大し、衛星画像を利用し

た構造マッピングや岩相マッピングを実施して精度を向上させ、さらに現地調査によってチェックを行うことなどが想定されています。そのため、インドネシア地質局はGSJに衛星画像（ASTER, PALSAR）の提供や衛星画像解析技術の習得（インドネシアへの専門家派遣や日本での研修）な



写真 会議での発表後、総合討論に臨む脇田センター長（中央）。

どの支援を要請し、具体的な話し合いを行うために今回の専門家会議にGSJの国際協力関係者を招待しました。本件は現在GSJで対応を検討中です。

今回は会議の前後に石油天然ガス・金属鉱物資源機構(JOGMEC)ジャカルタ事務所を訪問し、この3月にタイのバンコクで開催される鉱物協力協議会合(ASOMM+3)

についての情報交換を行いました。日本貿易振興機構(JETRO)、国際協力機構(JICA)のジャカルタ事務所ではGSJのインドネシア地質局への研究協力についての理解やそのために必要な資金援助等をお願いしました。また、脇田センター長がかつて共同研究を行っていたインドネシア科学院(ジャカルタ)及び地質工学研究開発センター(バンドン)を訪問し旧交を温めあいました。

地質試料の移動作業の報告

岩石・コア試料整理委員会・地質試料利活用部会

第7事業所研究本館の6, 7, 8階の試料庫には、地質調査所時代から研究成果としての地質試料が保管されてきました。しかし近年、地質調査所から地質調査総合センターへと組織が改編され、職員の入れ替わりとともに、試料庫における試料の管理や運営が十分行き届かなくなってきました。また、産総研としてスペースの有効利活用促進とあわせて試料庫の管理・運営体制を見直すため、2007年より、岩石・コア試料整理委員会が設置され、試料庫の現状調査が開始されました。2008年には、GSJ内の様々な試料の整理をはじめ今後の試料管理を議論する場として、地質試料利活用委員会(2009年には地質試料利活用部会)が設置されました。岩石・コア試料整理委員会は現在、地質試料利活用部会の下に位置づけられています。

岩石・コア試料整理委員会ではまず、各職員にご協力いただき、試料庫において保管されている試料の所有者と試料数の把握を行いました。そして、6, 7, 8階の全ての地質試料を7-3A棟で保管するための移動作業ならびに平成20年度に8階の居室化工事を行いました。なお、6, 7階については、現在、居室化工事を進めており年度内に移転する予定です。7-3A棟には、これまで地熱ボーリングコアなどのコア試料が保管されていましたが、これらの一部を旧エネルギーセンター機械室に新たに設置した可動棚に移動しました(写真1)。そして、地熱コアの入っていたスペースを各ユニットと個人スペースとして配分し、8階の試料については2007年から2008年にかけて、6, 7階については2009年の6~8月にかけて移動しました(写真2)。

7-3A棟はこれまで、主に特定のボーリン

グコアが保管されていたため、一部の職員にしか利用されていませんでした。今回の移動作業により、今後はより多くの職員が活用することになるため、これまで使用していなかった空調(換気のみ)を入れ、7-8棟側のガラス扉の鍵を電子錠にするという環境整備を行いました(写真3)。



写真1 旧エネルギーセンター内に設置された可動棚。



写真2 7-3A棟1階に移動、整理された地質試料。



写真3 7-3A棟北側入口に設置された電子錠。

棟内にはエレベーターがないため、重い試料の移動については、本館か7-8棟のエレベーターを用いる必要があるなど、利便性に欠ける点も残っています。今後も棟内の環境整備を進めることで、より使いやすい試料庫にしたいと考えておりますので、GSJの皆さまには委員会までご意見を

お寄せいただければと思います。

地質試料の移動について、ご協力いただいた職員の皆さまには御礼申し上げます。

(文責 中島 礼・角井朝昭・飯村一清)

ジオネットワークつくばニュース1月号

古川 竜太・佐藤 由美子・藤原 智晴（地質調査情報センター）

1月15日 第8回サイエンスカフェ

新年最初のカフェは「ご近所の防災力アップ—つくば市民レポーターになりませんか?—」と題して、防災科学技術研究所の長坂俊成さんを講師にお迎えしました(写真1)。これまでのサイエンスカフェは地球や環境、生物など、どちらかというと客観的な対象がテーマでした。しかし今回のテーマはずばり「人間」です。長坂さんは研究所で唯一の文系研究者だそうです。これまで「防災」は自然災害の性質を知ることによって重点が置かれてきましたが、防ぐことのできない災害もあることがわかってきた現在は、災害とどう向き合うかが重要課題となっています。

長坂さんの取り組みは災害を人のネットワークで受け止め、被災者同士が自発的に助け合う「地域防災力」という概念です。災害が極端に大きな規模でない限り、地域が全滅するという災害は少なく、災害を受けてもあまり被害を受けていない人が大きく被害を受けた人を助けることが出来ます。これが災害復旧の第一段階で、被害の程度によって外部（近隣自治体や国の機関など）の救援を待つ第二段階に移ります。このとき、被災者同士で助け合う第一段階で効果的な役割を果たすのは普段からの人と人とのつながりであるというのが長坂さんの主張です。そのために、弾力的な意志決定を組み込んだ災害想定訓練やラジオドラマの作成、市民レポーター制度で一般市民が情報発信できるコミュニケーション基盤を構築するなど、多彩な活動が紹介されました。これは災害だけでなく、普段の社会生活においても市民が自力で問題解決する枠組みを作る、いわば21世紀の「地域づくり」と感じました。

これまで防災対策というと、自治体で作ったマニュアルを担当者が実行するというイメージがありましたが、災害の多様性を考えると地域防災力の醸成によって人のネットワークを強化することが合理的な解決策と言えそうです。

質問タイムでは市民レポーター制度についての質問が多く出され、皆さんの関心を集めていることがうかがわれました。市民レポーター制度についてはeコミュニティつくば (<http://reporter.e298.jp/>) をご覧ください。

1月23日 第4回野外観察会を開催

あなたは桜川を知っていますか?つくば市の東部を流れ

る川ですが、北条米の産地を流れていることでも知られています。この川は広大な河原（現在はほとんど田んぼ）を持っていますが、その流れは驚くほど小規模です。この広大な河原を作ったのはかつての鬼怒川で、鬼怒川が流れを西に移したため、残ったのが現在の桜川なのです。

今回は鬼怒川がかつて流れていたころの証拠をつかむため、ジオネットワークつくばでは、つくば市栗原の桜川河畔でボーリング調査を行い、その現場を見学しました(写真2)。用地は「NPO 桜川ふるさと自然再生の会」が手入れている土地をお借りしました。やぐらを組んで機械



写真1 eコミュニティつくばを説明する長坂氏。



写真2 つくば市栗原のボーリング掘削現場。



写真3 応用地質(株)技術研究所の1350mボーリング孔。

で穴を掘っている様子は迫力があります。一見単純な作業ですが、鉛直に掘るには経験とテクニックが必要です。また岩石を綺麗にくり貫くため、力の入れ方や刃先を替えたり様々な工夫をしています。ジオスライサーを使って表層の土壌を採取し、はぎ取り標本を作る実演もありました。

天気は良かったものの寒い河原で思い思いの昼食をとった後、筑波西部工業団地の応用地質(株)技術研究所に移動しました。つくばの地質とボーリング技術について講義を受けた後、実際に桜川で採れたボーリング試料を観察し、表層の北条米を作るのに適した粘土層や、その下の礫層を観察しました。礫層は筑波山周辺にはないチャートや安山岩を含んでおり、かつて鬼怒川が流れている頃を想像することができました。研究所では1,350mのボーリング孔も見せてもらいました(写真3)。深度600mから基盤岩が出てくるとのことでしたので、筑波山はかつて1,400m以上の高さがあった?ということになります。かつての関東平野を妄想しながら家路につきました。

ジオネットワークつくばフェスティバル つくばアースデー 2010 2/27・28

主催 ジオネットワークつくば **ジオネットワークつくばフェスティバル**
2010 2/27・28 **つくばアースデー**
会場 つくばエキスポセンター

参加費 つくばエキスポセンターの入場料が必要です。このチラシ特等券で2割引(大人240円、小人120円)となります。

つくば市と研究機関や団体が集まって地球や環境のことを考える「ジオネットワークつくば」(JST 地域ネットワーク支援事業)では、広く市民の皆様につくばの自然について身近に考えていただくためのフェスティバル「つくばアースデー」を開催します。みなさんも一緒につくばの森、水、土、そして未来のことを考えてみませんか?

13:00-13:30 **Dr. ナダレンジャーがやってくる** 2/27

地球科学界のスーパーヒーロー Dr. ナダレンジャーこと藤田自明さん(防災科)が、ついにジオネットワークつくばとコラボします!

13:30-16:30 **市民講演会「つくばの20年」** 2/27

つくばは研究学園都市の骨格が完成してから現在に至るまで20年経ちました(1989-2009)。地域の発展を考えます。

基調講演
「大地の利用と地質図
—つくば研究学園都市20年の発展—
講師 一洋 (産総研 OB)

つくばは研究学園都市の誕生を遂げられた地質図から、つくばの過去と未来がわかります。ワークショップや展示台を備え、地質図がどこにあるのか、家や道路を造るのに使えない場所はどこか、などを解説します。皆さんの疑問にもお答えします。

「野生生物の性がよくなる?」 2/28

産つきのタニシやメダカなど野生生物に現れた変化についてお話しします。

「筑波」とつくばの農村景観—里地蔵山の今昔— 2/28

昔の「里地蔵」の地域特性と農村風景、その中で変化してきたつくばの暮らしが、今日、どのように変化してあり、その中で、とくに生物多様性の面からどのような影響が起きているかをお話しします。

「つくば市周辺の森林と地質」 2/28

つくば市の筑波共同試験地、石岡市、柳川市などの森林と地質の特徴、「森林地質」についてお話し。土壌調査の写真や森林の写真などもお見せします。

「つくば市の防災を考える—自然と社会の視点から—」 2/28

つくばの各種ハザードマップや航空写真などを用いて、つくばの自然と地域の社会の健全な発展を促すための防災リスクを評価し、防災対策に結びつけるための事例を紹介します。筑波小学校区の防災訓練やWEBKIDSの子どもを行います。

13:00-15:30 **リレーサイエンスカフェ** 2/28

第一部 農の話
「筑波山系のいま」 2/28

田舎に美しい姿を見せる筑波山系一歩山に入れば、環境浄化の仕組みの理が立ちます。環境の回復には、筑波山系と人々の暮らしとのかわりを取り戻し、自然のいのちを尊重することではないでしょうか?

「みんなの知らないお家の研究」 2/28

毎日おいしく食べているご飯ですが、まだまだ知らないことがいっぱいあります。ここでは、お米の食味(おいしさ)についての研究を中心に、つくばで育っているイネの品種改良員についてご紹介します。

第二部 自然とヒト
「応用地質学のスズメ」—ハザードマップと地質系を例に— 2/28

「ヒトと環境を守るための地質学」について、講師のハザードマップと地質系保全を例に紹介します。

「気象と生活」—気象は心の食糧— 2/28

日本人は昔から、特有の国土と気象環境の中でからだを鍛えてきました。しかし、現代の日本人のからだとは、昔と大きく違っているように思います。手紙のころから健康なからだを作る方法を、気象の観点からお話しします。

「イノシシから見た人と野生動物との関わり」 2/28

これまで、人が生活する場で見ることになった野生動物が、最近では、屋外に下りてきて凶悪となつています。ここでは、イノシシを例に、野生動物と人間の関わりを捉えながら、この関わりが起これた原因を探り、新たな時代の関わりについて考えます。

展示コーナー 2/27-28

標本展示「つくばの化石や岩石」
フクマン層、長化層、産総研地下600mの地質図、イノシシの標本などを見ることが出来ます。

板津洋吉写真展「筑波山系のいま」

コンテスト「わたしのまちつくば」 2/27-28

作文・絵画をその場で書いて応募できます。
・研究員に聞いてみたい質問募集。
・お気に入りの場所をジオスポットに登録してみませんか?

<http://www.geonet-tsukuba.jp>

スケジュール	
2月27日~28日	つくばアースデー (つくば, エキスポセンター) http://www.geonet-tsukuba.jp/event/197
3月2日~5日	ASEAN+3 (タイ, バンコク)
3月10日	第7回日本ジオパーク委員会 (東京)
3月12日	ジオネットワークつくば第11回サイエンスカフェ (つくば, エキスポセンター「レストラン」) http://www.geonet-tsukuba.jp/science/203
3月16日~17日	CCOP第55回管理理事会 (韓国, 釜山)
3月20日	地質標本館第22回 自分で作ろう!! 化石レプリカ (地質標本館)
3月23日~25日	スプリングサイエンスキャンプ (産総研東北センター)
3月24日~26日	第2回日本地学オリンピック大会「グランプリちきゅうにわくわく」 (産総研つくばセンター)
3月27日~28日	IYPE 終了記念イベント「惑星地球フォーラム2010 in アキバ -君たちと考える 環境・防災・資源-」 (秋葉原, 富士ソフトアキバプラザ6階)

GJSJ Newsletter No.65 2010/2

発行日: 2010年2月18日

発行: 独立行政法人産業技術総合研究所
地質調査総合センター

編集: 独立行政法人産業技術総合研究所
地質調査情報センター

脇田 浩二 (編集長)
藤原 智晴 (編集担当)
志摩 あかね (デザイン・レイアウト)

〒305-8567 茨城県つくば市東1-1-1 中央第7
TEL:029-861-3687 / FAX:029-861-3672

編集後記
藤原 智晴 (地質調査情報センター)

例年ですと、年末からこの時期にかけては、開催されるイベントが少なくなりがちなのですが、今号は8編の投稿をいただきました。おかげさまでもちまして、今号も8ページ構成でお届けします。

今年の年度末は第2期中期計画の最終年度でもあり、通常の年度末よりなにかと忙しい日々が続きますが、みなさま体調をくずされないうえに留意ください。

あと一ヶ月でお花見の季節です。

GJSJ ニュースレターは、バックナンバーも含めて、地質調査総合センターホームページでご覧になれます。

地質調査総合センターホームページ <http://www.gsj.jp/>